

〔調査報告〕 東京基督教大学における 自己調整学習理論に基づく学習支援の取り組み

杉谷乃百合

(東京基督教大学准教授)

自己調整学習理論¹にピアサポート²を取り入れて構成した学習支援システムを本学で実施して4年が経つ。これまでの取り組みの紹介を兼ねて、考察、結果、展望をまとめる。

1 理論的背景

ピアサポートによる本学の学習支援システムは、バンデューラ（Albert Bandura）の社会的認知理論³から派生している自己調整学習理論を基盤として構成されている。バンデューラは伝統的な社会的学習理論に、社会的モデリング、観察学習、代理強化等の原理を導入して、人間の機能に関する認知的な相互作用モデルを説いた。この理論をバンデューラは社会的認知理論と呼んだ。社会的認知理論では人間の機能は、行動、環境、個人の三変数の相互作用が含まれ、自己調整学習はこの三項の相互作用として理解される⁴。環境の力や潜在的な内的衝動によってのみ行動する受動的な有機体でなく、自らを組織化して能動的に行動し、内省し、自らを調整することが人はできる存在なのである。人は自らの環境と社会システムを生成し、同時に、生成される、というのがバンデューラの考えである。つまり、自分の行った行動の結果に対する解釈の仕方が、その人の環境と個人要因（変数）に

- 1 Barry J. Zimmerman, "Investigating Self-regulation and Motivation: Historic Background, Methodological Developments, and Future Prospects." *American Educational Research Journal* 45 (2008): 165-83.
- 2 Alexander W. Astin, *What matters in college?* San Francisco: Jessey-Bass, 1999.
- 3 Albert Bandura, *Social Foundations of Thought and Action: A Social Cognitive Theory*. Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1986.
- 4 Barry Zimmerman and Dale H. Schunk, ed., *Educational Psychology*. Mahwah: Erlbaum, 2004.

影響し変化をもたらし、それが次の行動にも影響と変化をもたらす。このプロセスにおいて「認知」が果たす役割はとても重要となる。社会的認知理論は様々な視点を提供し、学習や学生生活においても人間の機能の向上のため、適切な活動にはどのように取り組めばいいのかを考えることができる。学ぶ者の歪んだ自己信念や感情、思考における習慣等の個人要因が改善されることで、学びのスキルや学習を調整する活動等の行動要因は促進される。また環境要因である教室、学校、地域等がもし学習者の学習に関する態度や学習行動を阻害していたとしたら、環境要因を改善することによって学習者のコンピテンスは高まる可能性がある。

自己調整 (self-regulation) は様々な立場の理論から研究が行われているが、自己調整とは、個人がどのように思考や行動を調整しているのかそのあり方をさす。人間の学習を取り扱う自己調整学習 (self-regulated learning) の定義は一般的には、個人が学習に必要な適切な知識や技術を習得し、適材適所で自らが行う操作をさす。社会的認知理論の自己調整学習の初期研究では、認知、動機づけ、行動のプロセスに能動的に関わる個人の能力に焦点が当てられていたが⁵、最近の研究は、感情を調整する能力⁶、目標達成に向かった特性⁷が強調されている。ジーマーマン (Barry Zimmerman) の定義⁸を使うと、自己調整学習とは、学習目標の達成のため、組織的に認知、行動、情動を喚起させ、持続する過程である。そこには、目標に向けた活動が含まれ、学習者はそれらの活動を開始、修正、維持する。この自己調整は状況特殊性⁹をもち、場面限定的で、普遍的な特性ではなく、また、特定の発達レ

-
- 5 Barry J. Zimmerman and Albert Bandura, "Impact of Self-regulatory Influences on Writing Course Attainment," *American Educational Research Journal* 31 (1994): 845-62.
 - 6 Paul R. Pintrich and Akane Zusho, "Student Motivation and Self-regulated Learning in the College Classroom," in *Higher Education: Handbook of Theory and Research*, Vol. 17, edited by John C. Smart (Dordrecht: Kluwer Academic Publishers 2002), 55-137.
 - 7 Paul R. Pintrich and Dale H. Schunk, *Motivation in Education: Theory, Research, and Applications*. Merrill: Prentice Hall, 2002.
 - 8 Barry J. Zimmerman, "Attaining Self-regulation: A Social Cognitive Perspective," in *Handbook of Self-regulation*, edited by Monique Boekaerts, Paul R. Pintrich and Moshe Zeidner (San Diego: Academic Press, 2000), 13-41.
 - 9 Barry J. Zimmerman, "Academic Studying and the Development of Personal Skill: A Self-regulatory Perspective," *Educational Psychologist* 33 (1998): 73-86; Barry J. Zimmerman, "Self-efficacy in Educational Development," in *Self-efficacy in Changing Societies*, edited by Albert. Bandura, (New York: Cambridge University Press, 1995),

ベルをさすものでもない。この理論では、学習者は情報を受け身的に受容するというよりは、学習目標に向かって能動的に動き、目標達成を制御しようとする者と理解される。

パスカレラとテレンジーニ (Ernest Pascarella、Patrick Terenzini) の研究¹⁰では、教室外での仲間 (ピア) との関わりが学習に積極的な影響があることを示している。また彼らは、大規模な学生調査において、正課教育と学習支援が統合された学習経験の効果に関してデータを提供している。正課教育と学習支援の統合が起る大切な学内要素としてピアとの相互関係と教員との相互関係があげられている。また、教授法の効果のあるテクニックとしてピアチュータリングがリストされている。アスティン (Alexander Astin) は、ピアによる影響の本質は解明されていないが、社会的にも心理的にもピアの影響は、大学時代の成長と発達において一番影響力のある源であると述べている¹¹。

2 ピアチュータリング

東京基督教大学では、2003 年度から成績不振者への学習支援を教務部と学生部との協働により開始した。学業不振は単なる基礎学力低下・不足の問題ではなく、メタ認知や精神の健康の不調が関連しているという学生相談室の見識を受けて、教務部と学生部が連携を取りながら学習支援のシステムを構築する歩みが始まった。10 年続いた学生相談室スタッフが中心となって学習支援を受ける学生をサポートする体制を変更し、2012 年度からはピアチュータリングによる支援制度を採用した。自己調整学習理論を理論的背景に、学習不振者 (全学期の GPA が 1.80 未満) の学習意欲を喚起し、彼らがメタ認知を発達させ、学習スキルを身につけ能動的な学習者になることを長期目標として、短期目標としては、当該学期の GPA を 1.80 以上にすることを目指して学習支援を行っている。

ピアチュータリングは、学習支援スタッフによって選ばれ、新年度開始前にトレーニングを受けた学生チューター (累計 GPA 3.00 以上、学部 3 年生以上) をテ

239-56.

10 Ernest T. Pascarella and Patrick T. Terenzini, *How College Affects Students: Findings and Insights from Twenty Years of Research*. San Francisco: Jossey-Bass, 1999.

11 Alexander W. Astin, *What Matters in College? Four Critical Years Revisited*. San Francisco: Jossey-Bass, 1993.

ーティと学期ごとにマッチングさせて行っている。チューターの受けるトレーニングは三つのトレーニングセッションから成り立ち、各セッションは2時間の講義内容に相当する。その内容は、学習支援チュータリングの目的、チューターの資質と心構え、職務内容、守秘義務を含むチューターの倫理規定、自己調整学習の循環過程の学び等である。3日に分けてトレーニングをする場合の他、それに参加できなかった学生対応として集中講義型で行うパターンもある。チューターは有給である。

ピアチュータリングは、週1回1時間、一対一で行われる。ピアチュータリング専用の学習室、LSC (Learning Support Center) 室が設けられているが、学習に集中できる場所を自分たちで選ぶケースも少なくない。学習支援としてのチュータリングは、いわゆる「家庭教師」とは異なり、学習成績不振者の多くの場合の課題である、メタ認知的な事柄に焦点を当てていることに特徴がある。授業出欠の確認、時間の管理、課題に関する計画と実行、教材の整理、学習計画作成等におけるサポートや、学習方法、レポートや課題の進め方においてアドバイスを受け、計画、実行を目指す。

チューターのセッション以外での任務は、「学習支援チュータリング報告」を記入して教務部に提出することである。提出された報告を担当職員が確認をして、チューターからの質問やコメントに対してメール等で対応、サポートする。チューターは学期中のフォローアップミーティングと学期終了後のレビューミーティングに参加し、状況の確認とチュータリングに関するアドバイス等を受ける。

3 結果と展望

ピアチュータリングを受けた当該学期と前学期のGPAの比較においては、おおむね積極的な変化が観察される。メタ認知的要素の時間管理や課題の優先順位に関するアドバイス、チューターによる定期的な支援により学習計画のプランと実行による成功体験等で学修意欲が向上する者もいた。しかし、成績が向上して学修支援対象でなくなった学生が再び成績不振になるケースも観察されている。自己調整学習方略のトレーニングは学習者の能動性を喚起し、学習者が自身の学習に対して主体的になるために効果的であるという研究¹²を支持するように思われると同時に、

12 Wilbert J. McKeachi, Paul R. Pintrich and Y. G. Lin, "Teaching and Learning Strategies," *Educational Psychologist* 20, (1985): 153-60; Barbara K. Hofer and Paul R. Pintrich, "The Development of Epistemological Theories: Beliefs about Knowledge

トレーニング期間やトレーニング効果の持続の問題も投げかける。自己調整学習はシュンク¹³が指摘しているように、学習による認知的進歩をモニタリングするメタ認知の働きが重要で、メタ認知の働きが自己調整学習の成立に大きく関わっていると考えられている。

細川¹⁴がピアサポートという方法の有効性の考察で、学生同士という関係の気安さ、影響力の大きさ、ピアサポーター自身の成長にもつながるという点は、本学の学習支援チュータリングでも観察される。チューティの学習不振の改善と同時に、チューターが他者理解をすることの重要性を学ぶ機会になっているという報告もあがっている。

学習の課題や学習の問題は教務部を中心にピアチュータリングで対応し、心理面やパーソナリティ等の複合的な問題は学生部と教員が連携をして対応してきた。これからのチャレンジとしては、ピアチュータリングでは対応できない、根本的な学力不足、学習障害、心理的不適応や精神の病等が休学、退学になるケースもあり、入試制度の見直し、学ぶコミュニティとしての環境作り、教職員間の更なる連携が必要とされている。また、小貫¹⁵の指摘するように、学生の認知発達（知力成長）と心理発達（人間的成長）という二つの学習要素の統合を、正課教育と学生支援の分断が起こらないよう、大学という組織の各部門が有機的に働くための努力と工夫をさらに試行錯誤しつつ、学生達と共に歩む姿勢が教育の現場では求められている。ピアチュータリング学習支援のような、ローカル大学の現状に即した準カリキュラムの開発は、学生全入時代の教育の要である。

and Knowing and Their Relations to Learning,” *Review of Educational Research* 67 (1997): 88-140; Barry J. Zimmerman, “Sociocultural Influence and Students’ Development of Academic Self-regulation: A Social-cognitive Perspective,” in *Big Theories Revisited*, edited by Dennis M. McNerney and Shawn van Etten (Charlotte: Information Age Publishing, 2004), 139-64.

- 13 Dale H. Schunk and Barry J. Zimmerman, ed., *Motivation and Self Regulated Learning*. New York: Erlbaum, 2008.
- 14 細川和仁「初年次教育における学習ピアサポート活動」(『秋田大学教養基礎教育研究年報』第8号、2008年、1-91頁)
- 15 小貫友紀子「米国学生支援における学習者中心主義への転換要因とアセスメントのインパクトについて」(『名古屋高等教育研究』第4号、2014年、97-116頁)

[参考文献]

- Bandura, Albert, "Perceived Self-efficacy in Cognitive Development and Functioning," *Educational Psychology* 28 (1986): 117-48.
- Schunk, Dale H., *Learning Theories: An Educational Perspective*. Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1996.
- Trenzini, P., Pascarella Ernest and G. Blimling. "Students' Out-of-Class Experiences and their Influence on Learning and Cognitive Development: A Literature Review," *Journal of College Student Development* 37 (1996): 149-62.